

孔子は倭人を知っていた

周代四夷の史料批判



令和8年(2026)4月11日(土)
古田史学リモート勉強会
古賀達也

國枝浩「『夷狄』考」の衝撃

—孔子は東夷(倭国)を知っていたか—

衝撃的な論稿に接した。國枝浩「『夷狄』考 『論語』と『史記』より」『東京古田会ニュース』226号(2026)。同稿の主張の論点と史料根拠は次の通り。

- (a)『論語』には「夷狄」の語は見えるが、「東夷」「北狄」のように方角とは結びつけられていない。
- (b) このことから、孔子の時代(周代春秋期・紀元前六世紀頃)の「夷狄」は周辺の未開の異民族と認識されるにとどまっている。
- (c) 「夷狄戎蛮」と方角(東西南北)が結びつけられるのは、司馬遷の『史記』やその影響を受けた後代の『論語』解説書による。
- (d) 従って、『論語』 公冶長などを根拠として、孔子が東夷の国としての倭国(日本列島)の存在を知っていたとする古田説は『史記』に幻惑されたものであり成立しない。

國枝説は論証の方法において不備があり、次の理由から賛成できない。

(i) 前漢代に成立した『史記』などに、「夷狄戎蛮」と方角(東西南北)が結びつける記事があるという史料事実が、前漢代の認識を示す史料根拠には使えても、周代にそうした認識はなかった、とする根拠にはできない。

(ii) 孔子の「四夷」認識を確認するためには『論語』だけではなく、孔子と同時代(春秋期)か、せめてその直後(戦国期)の史料に基づくことが必要である。



孔子



古田武彦『邪馬一國への道標』には文献史学の史料根拠として、**王充**(後漢代、一世紀の人物)の『**論衡**(ろんこう)』に記された、倭人の周代貢献、記事が紹介されている。

○**周**の時、天下太平、越裳、雉を獻じ、**倭人**鬯艸(ちょうそう)を貢す。(卷八、儒増篇)

○**成王**の時、越裳、雉を獻じ、**倭人**暢草(ちょうそう)を貢す。(卷一九、恢国篇)

王充は後漢の**光武帝**に仕えた官僚であり、光武帝が倭人に金印(志賀島の金印)を与えたことを知っているはず。『**論衡**』に記された「**倭人**」は、金印を与えられた日本列島の「**倭人**」であると認識していたことを疑えない。すなわち、後漢の天子や官僚たちが、**周代における倭人の鬯艸貢献伝承**を史実として、疑っていない。



『春秋左氏伝』

周代戦国期中葉の成立。広く見ても、周代春秋期と秦代の間に成立。

①卅一年、夏、齊候來獻戎捷、非禮也。凡諸侯有**四夷**之功、則獻于王。王以警于**夷**。

〔訳文〕齊候來たりて戎の捷を獻ずるは、禮に非(あら)ざるなり。凡そ諸侯、**四夷**の功有れば、則ち王に獻ず。王以て**夷**を警(いまし)む。

②賜我先君履、**東至于海**、西至于河、南至于穆陵、北至于無棣。

〔訳文〕我が先君に履(り)を賜ひ、**東は海に至り**、西は河に至り、南は穆陵に至り、北は無棣(むてい)に至る。

③若出於**東方**、觀兵於**東夷**、**循海而歸**、其可也。

〔訳文〕若し**東方**に出(い)で、兵を**東夷**に觀(しめ)し、**海に循ひて歸らば**、其れ可ならん。

④六人叛楚即**東夷**。

〔訳文〕六人、楚に叛(そむ)き**東夷**に即(つ)く。

⑤秋、楚公子朱自**東夷**伐陳。

〔訳文〕秋、楚の公子朱、**東夷**より陳を伐(う)つ。

〔語釈〕**東夷**:もと陳の邑。陳・楚の東にあつたので**東夷**と称したものという。

⑥**蠻夷戎狄**、不式王命。

〔訳文〕**蠻夷戎狄**、王命を式(もち)いず。

『孟子』の東夷と西夷

孟子(孟軻、前372～前290)は**周代戦国期**の人物。**孔子**(前552～前479)の孫弟子くらいに当たる。孟子没後(**周代戦国期**)に編纂された。

孟子曰。舜生於諸馮。遷於負夏。卒於鳴條。**東夷**之人也。文王生於岐周。卒於畢郢。**西夷**之人也。地之相去也。千有餘里。世之相後也。千有餘歲。得志行乎中國。若合符節。先聖後聖其揆一也。『**孟子 上**』離婁篇第四上

【訳文】孟子曰わく、舜は諸馮(しょひょう)に生まれ、負夏(ふか)に遷(うつ)りて、鳴條(めいじょう)に卒(おわ)る、**東の夷**(えびす)の人なり。文王は岐周に生まれ、畢郢(ひつえい)に卒る。**西の夷**の人なり。地の相い去ることは千有餘里、世の相い後(おく)るるは千有餘歳なるも、志を得て中国に行えることは、符節(わりふ)を合わすがごとし。先聖も後聖も、その揆(みち)は一つなり。

【大意】**東夷**の舜(先聖。夏王朝建国期の帝)と**西夷**の文王(後聖。殷を滅ぼし周王朝を建国した武王の父)は、生きた時代も住んだ地も離れているが、二人の行いは全く一致している。



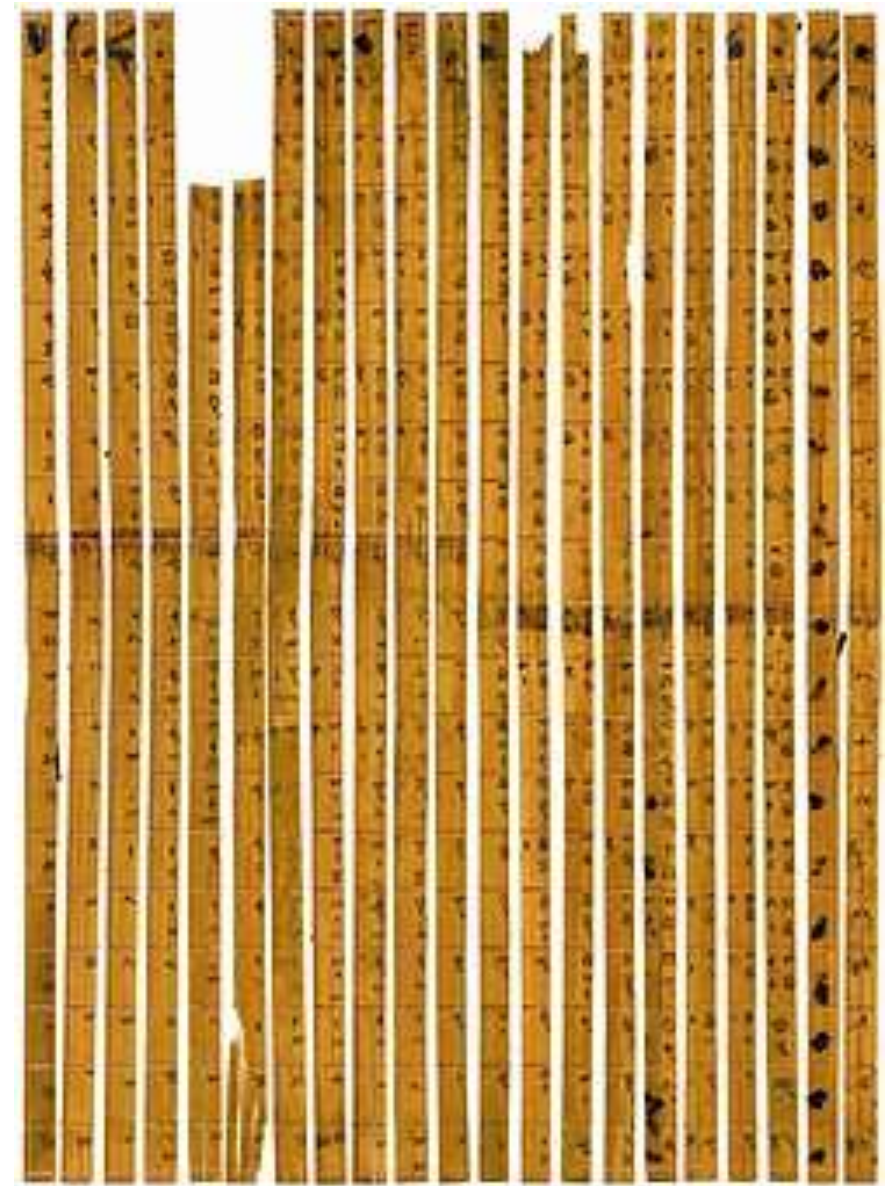
孟子

精華簡『繫年』の「西戎」

成立年代は紀元前305±30年(戦国期後半)

〔原文〕周幽王取妻于西申、生平王、王或(又)取褒人之女、是褒姒、生伯盤。褒姒嬖于王、王與伯盤逐平王、平王走西申。幽王起師、回(圍)平王于西申、申人弗畀、曾人乃降西戎、以攻幽王、幽王及伯盤乃滅、周乃亡。〔精華簡『繫年』第二章〕

〔釋文〕周の幽王、妻を西申より取り、平王を生む。王或いは褒人の女を取り、是れ褒姒にして、伯盤を生む。褒姒、王に嬖せられ、王と伯盤と平王を逐(お)い、平王西申に走る。幽王師を起し、平王を西申に回(かこ)み、申人弗畀(おそ)れず、曾人乃ち西戎に降りて、以て幽王を攻め、幽王と伯盤と乃ち滅び、周乃ち亡ぶ。



精華簡『算表』

精華簡とは北京の「精華大学蔵戦国竹簡」の略で、2388点の竹簡からなる膨大な史料。このうち、138件からなる編年体の史書が『**繫年**』と名付けられ、2011年に発表された。西周から春秋時代を経て戦国期までおおむね時代順に配列されており、全二三章のうち第一章から第四章までに西周の歴史が記されている。「**西戎**」記事は第二章にみえる。

成立年代が**炭素同位体比年代測定**により**紀元前305±30年(戦国期後半)**と証明されている竹簡。

幽王(ゆうおう)は、周朝第12代の王(前795～前771年)。宣王の子。携王の兄。平王、太子伯服(伯盤)らの父。**西周最後の王**である。褒姒という女性を愛し、彼女の笑顔を見たさに王朝を滅亡させ、自らも反乱に遇い命を失った。

『爾雅』釋地第九 周代戦国期成立

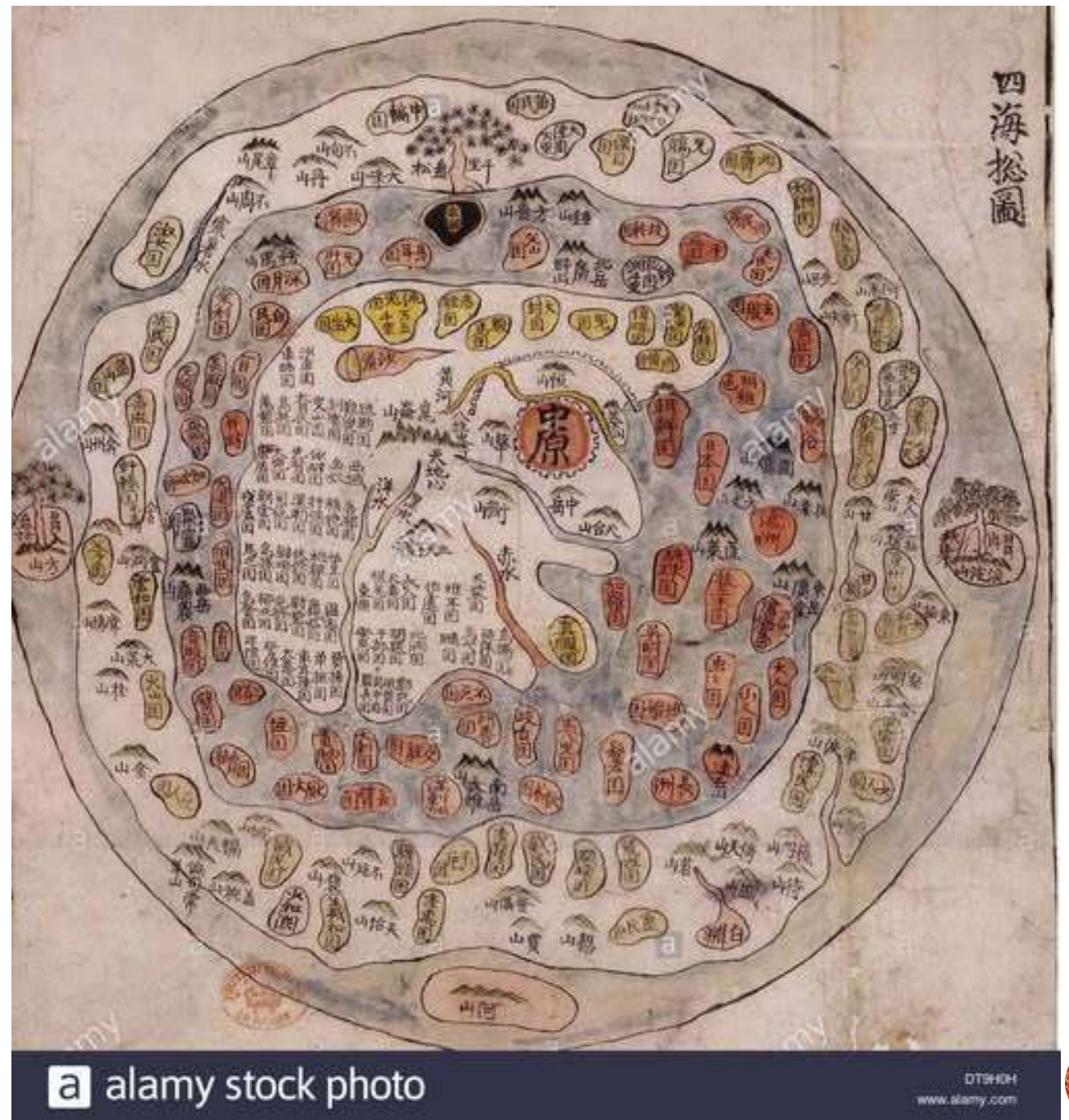
〔原文〕東至靺泰遠、西至於邠國、南至於濮鈞、北至於祝栗、謂之四極。觚竹、北戸、西王母、日下、謂之四荒。九夷、八狄、七戎、六蠻、謂之四海。岨齊州以南、戴日爲丹穴、北戴斗極爲空桐、東至日所出爲大平、西至日所入爲大蒙。大平之人仁、丹穴之人智、大蒙之人信、空桐之人武。——四極。

〔釋文〕東は靺泰遠に至り、西は邠国に至り、南は濮鈞に至り、北は祝栗に至る、これを四極という。觚竹、北戸、西王母、日下、これを四荒という。九夷、八狄、七戎、六蠻、これを四海という。岨齊州の南、日を戴くところを丹穴と爲し、北は斗極を戴くところを空桐と爲し、東は日が出るところを大平と爲し、西は日が入るところを大蒙と爲す。大平の人は仁、丹穴の人は智、大蒙の人は信、空桐の人は武。——四極。

これは東西南北方向にある四極・四荒・四海を論じた記事。その四海の冒頭に「九夷」とあり、「八狄」「七戎」「六蠻」と続き、これを「四海と謂う」とある。四海とは四方向(東西南北)にある「海」のことと理解でき、「九夷」「八狄」「七戎」「六蠻」とは東夷・北狄・西戎・南蠻に相当すると思われる。従って、『爾雅』成立時には、方位と夷狄戎蠻をセットにして表記するという「四夷」認識が成立していたと想定できる。



中華思想の世界観



古代中国の世界認識「四海図」

『山海経』の「倭」 中国最古の地理書で周代戦国期成立

○『山海経』海内北経

〔原文〕蓋國在鉅燕南、倭北。倭屬燕。

〔釋文〕蓋國は鉅燕(きょえん)の南、倭の北に在る。倭は燕に屬す。

蓋國は鉅燕の南、倭の北にあると記されている。鉅燕とは中華(海内)の中の東北の隅にある大国燕(えん)のことで、「鉅」とは「巨」を意味する。その南にある蓋國は朝鮮半島の国と思われ、その蓋國は倭の北にあると記されている。従って、倭は朝鮮半島の南岸、あるいは朝鮮半島南岸と日本列島を含む領域の可能性がある。

鉅燕の位置は同じ『山海経』の「海内東経」に次のように記されており、中華(海内)の東北の隅(陬)、すなわち、北京付近から朝鮮半島の北側に至る大国と思われる。従って『山海経』の地理認識は比較的 `正確、`ではあるまいか。

○『山海経』海内東経

〔原文〕鉅燕在東北陬。

〔釋文〕鉅燕は東北の陬(隅)に在る。

「倭は燕(えん)に屬す」とあり、当時の倭は燕国に政治的に属していたことになる。⑪

今、わたしに注目されるのは、「倭は燕に屬す」の一句です。「屬す」とは、何を意味する言葉でしょう。“地理的に属している”というのでは、意味をなしません。やはり、それは“政治的に属している”ことです。いいかえれば“その倭人は燕へ貢献物を持参していた”ということです。「貢献物」こそ、“政治的に属す”ことの“物理的証拠品”なのですから。

とすると、“倭人は燕に貢献物をもっていった”ことになるわけですが、「燕」は決して終着点ではありません。“周の天子のもとの燕王”なわけですから、「夷蛮」が燕王に貢献物を持参する、ということは、実は“燕王を通じて周の天子に貢献する”ことなのです。とすると、ここにも——この戦国期の周の書物にも——「倭人の周王朝貢献」の事実が裏付けられていたことになるわけです。

古田武彦『邪馬一国への道標』

「(一)縄文人が周王朝に貢献した 山海経の秘密」



周代春秋期、『論語』の史料批判

『論語』の「夷蛮戎狄」の用例

①「八佾 第三」

〔原文〕子曰、**夷狄**之有君、不如諸夏之亡也。

〔現代語訳〕**夷狄**であっても君主がいるのであれば、諸夏(中国)に君主がないよりはましだ。

②「子罕 第九」

〔原文〕子欲居**九夷**、或曰、陋。如之何。子曰、君子居之、何陋之有。

〔現代語訳〕孔子は**九夷**の中で暮らしたいと願った。ある人が「それは野蛮だ。どうしてそんなことができるのか」と尋ねた。孔子は「もし徳のある人(君子)がそこに住むなら、どうして野蛮だと言えるだろうか」と言った。

③「子路 第十三」

〔原文〕樊遲問仁。子曰、居處恭、執事敬、與人忠、雖之**夷狄**、不可棄也。

〔現代語訳〕樊遲(はんち)は仁について問うた。孔子は「礼儀正しく振る舞い、職務に励み、忠誠を尽くせ。**夷狄**に行っても、これらの徳を捨ててはならない」と言った。

④「子路 第十三」

〔原文〕子曰、善人教民七年、亦可以即**戎**矣。

〔現代語訳〕孔子は言った。もし善人が七年間民を教えれば、民を戦争へ赴かせることができる。

⑤「衛靈公 第十五」

〔原文〕子張問行。子曰、言忠信、行篤敬、雖**蠻貊**之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉。立則見其參於前也。在輿則見其倚於衡也。夫然後行。子張書諸紳。

〔現代語訳〕子張は行いについて問うた。孔子は言った。「言葉が誠実で信頼でき、行いが真摯で敬意に満ちていれば、**蠻貊**の邦でも行うことができる。言葉が誠実で信頼できず、行いが真摯で敬意に満ちていなければ、自分の故郷でさえ行うことはできない。立っていれば、自分の前に見え、馬車に乗っているときは、体が横木に寄りかかって見える。そうして初めて行うことができる。」子張はこれを帯に書き留めた。

ここで注目されるのが②子罕第九の「九夷」だ。『爾雅』釋地 第九にあった「九夷」の先例が『論語』にあったのだ。従って、この「九夷」も東夷の国と解すべきであろう。

従って、周代春秋期でも、「夷蛮戎狄」と方角「東西南北」とを結びつけて認識されていたとするべきだが、東夷・南蛮・西戎・北狄に固定化する時期は未詳。

他方、『山海經』には「倭」が朝鮮半島の南岸・南方にあったとされており、これら周代史料の指し示すところ、`孔子は倭人(倭国)を知っていた、とする古田説は成立している。



孔子

本来の**四夷**の意味

出典:『ウィキペディア(Wikipedia)』

古代、洛陽盆地**東方**に広がる黄河、淮河、長江の大デルタ地帯に住み、農業と漁業で生活を立て、河川と湖沼を舟をあやつって往来する人々を「**夷**」(い)といった。「夷」は「低」「底」と同じく「低地人」という意味で、東方の住人なので**東夷**ともいう。

洛陽盆地**北方**では、黄土高原東部の山西高原がモンゴル高原から南に突き出して黄河の北岸に接している。山西高原は、古くはカエデ、シナノキ、カバ、チョウセンマツ、カシ、クルミ、ニレなどの森林におおわれ、陰山山脈や大興安嶺山脈の森林に連なっていた。この森林地帯に住む狩猟民は、毛皮や高麗人参を平原の農耕民にもたらし、農産物を手に入れる交易を行っていた。この狩猟民を「**狄**」(てき)と言った。「狄」は交易の「易」と同じ意味で、北方の住民なので**北狄**ともいう。

洛陽盆地**西方**の、甘肅省南部の草原に住んでいた遊牧民は、平原の農耕民のところへ羊毛をもってやって来た。かれらは「**戎**」(じゅう)といった。「戎」は「絨」と同じく羊毛という意味で、西方の住人なので**西戎**ともいう。

洛陽盆地**南方**の山岳地帯には、焼き畑を耕す農耕民が住んでいた。かれを「**蛮**」(ばん)といった。「蛮」はかれらの言葉で人という意味で、南方の住人なので**南蛮**ともいう。

『論語』公冶長第五

〔原文〕子曰、道不行、乘桴浮于海。從我者其由與。子路聞之喜。子曰、由也好勇過我。無所取材。

〔釋文〕子曰く、道行われず、桴(いかだ)に乗りて海に浮かばん。我に従う者は、それ由か。子路これを聞きて喜ぶ。子曰く、由は勇を好むこと我に過ぎたり。材を取る所なからん。

〔現代語訳〕先生が言われた。(今の中華では)道が行われない。筏に乗って海に浮かぼう(海の向こうの国に行こうか)。私についてくる者は、由であろうか。子路がそれを聞いて喜んだ。先生は言われた。由は、武勇を好むことは私以上だ。しかし、筏の材料を得る才能はないな。

子路(前543～前481年)は、孔門十哲の一人。姓は仲、名は由。『論語』では字の子路をもってしばしば言及される。季路とも呼ばれる。

子路の生涯 魯国出身。孔子門下でも武勇を好み、そのためか性格はいささか軽率なところがある反面、質実剛健たる人物であった。『**論語**』には、性格の軽率さを孔子にとがめられるも、その人物の率直なるを持って愛された姿が記される。弟子の中で『**論語**』に出てくる回数が最も多い。

『**史記**』によれば、衛の高官にとりたてられ、衛の太子蒯聵(かいがい)の反乱を諫めたが、激怒した蒯聵の家臣が投げた戈で落命した。死の直前、冠の紐を切られた彼は、「君子は冠を正しくして死ぬものだ」と言って結びなおしたという。子路の遺体は「醢(かい、ししびしお)」にされた(死体を塩漬けにして、長期間晒しものにする刑罰)。これを聞いた孔子は悲しみにより、家にあったすべての醢(食用の塩漬け肉)を捨てさせたと伝えられる。



子路

孔子と子路との対話には、孔子の二つの認識が示されている。一つは、中原の諸国に仁義を説いてきた孔子をして、「道行われず」と嘆く中華の状況。二つは、「桴に乗りて海に浮かばん」とあるように、海中の国にはその仁義が行われており、筏に乗って行ってみたいものだという願望。

この言葉を深読みすれば、道が行われているのは海の向こうの国だけで、西や南北の国では中華同様に仁義が行われていないと孔子は考えていた。そうでなければ、わざわざ筏で海を渡ろうとは言わないはず。大陸国家の中国では海路よりも陸路の方が安全で、孔子も陸路の旅行には慣れている。しかし、そこでも仁義は行われていないので、孔子は筏で海を渡ろうかと子路に語りかけた。海の向こうの国とはどこか。それは子罕第九の次の記事から推定できる。東方の海中にある九夷の国だ。

○『論語』子罕第九

〔原文〕子欲居九夷、或曰、陋。如之何。子曰、君子居之、何陋之有。

〔現代語訳〕孔子は九夷で暮らしたいと願った。（後略）

孔子が住みたいとまで言う**九夷**とは『**爾雅**』**釋地第九**に記された**東方の九夷**、すなわち**東夷の国**だ。同記事には、「**東は日が出るところを大平と為し**」「**大平の人は仁**」とあり、東の大平は儒教の最高の徳目を表す**仁**の国とされている。そこは孔子が筏で行きたいと願った仁義の国であり、東海の向こうにある東夷であることを如実に示している。この東夷の国とは、『**山海經**』に記された蓋國(朝鮮半島の国)の南にある**倭**が最有力。

このように『**論語**』**公冶長**の孔子の言葉を、子罕や周代史料に基づいて理解すれば、古田氏が「**孔子は倭人を知っていた**」としたのは、優れた論証に基づく有力説であることは明らかであろう。

最後に國枝氏に感謝したい。國枝稿に触発され、古田氏から託された周代研究を再開できたのであるから。